colors

湊　翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｃｏｌｏｒｓ

【Ｎコード】
Ｎ５９７０Ｙ

【作者名】
湊　翼

【あらすじ】
１６歳の誕生日。
美穂奈（みほな）は政略結婚させられる為に、部屋で軟禁状態にあった。
そこで、毎年誕生日になると現れる不思議な本を見つける。
いつも何も書いてないその本に、今日は金色に光る文字が浮かび上がった。
惹きつけられる様にその文字を目と指で追った美穂奈は、最後に文字が浮かび上がった瞬間、光に包まれ、気付くと知らない場所に立っていた。

プロローグ

水狼（ヴォルフィン）が鳴き、ラズは読んでいた本から視線を上げた。
水狼は気性が荒い方だが、こんな風に鳴く事はあまりない。
森で何かあったのだろうか？
不思議に思い窓の外を見てみるが、特に何もない。
首を一度だけ傾げ、ラズは視線を本へと戻した。
緑の革表紙に金の縁取りがある分厚い本。
ページを開けば、そこは真っ白な空白ばかりが続く。
だが、ラズはその灰緑色の瞳でそこに何かが書かれているかの様に凝視した。
細く、長い指が、その真っ白いページをそっと撫でると、うっすらと文字が浮かび上がった。
まるで、ラズの指から紡がれているかの様に現れるその文字は、金色に輝きゆっくりと白いページを埋めていく。
ゆっくりゆっくりとページを埋め、最後のページでその光はさらに大きく膨み…。
そして、弾けた。

■■■■■■◆■■■■■■■■◆■■■■■■■

出来れば今日という日を迎えたくはなかった。
と、自室に閉じこめられた美穂奈（みほな）は本気でそう思っていた。
今日。
そう、美穂奈は今日で１６歳になるのだ。
１６歳の誕生日、それは今まで行ってきた誕生日とは違う響きを持つ。

「１６歳…。嫌な法律よね。」
呟いて、美穂奈はベッドに突っ伏しる。
そう、１６歳。
日本では、女は１６歳、男は１８歳になると親の同意さえあれば結婚が許されるのだ。
そう、親の同意さえあれば、政略結婚させる年齢という訳だ。
「お義父様とお義母様の為だけど…。」
美穂奈はこの家の本当の子ではない。
小さい頃、両親を亡くし、どうする事も出来ずただ呆然と佇んでいた美穂奈を助けたのが、この家の夫婦であった。
だから、美穂奈は、この家に対して凄く恩を感じていた。
多少の事なら頑張れる。
勉強も、運動も、礼儀作法だって、一生懸命に頑張った。
彼等の期待に応えられるよう、一生懸命に。
だけど…。
「結婚かぁ…。」
呟いて、思い出す。
なんともつまらないあの婚約者の事を。
そう、あれは初めて顔を合わせて、庭で散歩した時の事だ。
彼はこう言った。
「あなたの様な素敵な人が僕のお嫁さんで本当に良かったです。あなたとなら、きっと良い家庭を築けると思います。」
と…。
何とも型にはまった定型文。
庭に出る前に少し「ご趣味は？」「お茶を少々」という、やはり型にはまったやりとりを少ししただけで、私の一体何がわかると言うのか。
どこをどう見て、何を基準として、私が素敵な人なのか。
そう思うと、吐き気がした。
そして、この人との先が見えてしまった。

型にはまった、つまらない結婚生活。
そんなものを強いられ一生生きていくのかと思うと、急に嫌になったのだ。
…だからと言って、逃げ出す勇気などないのだけれど。
固く閉ざされた部屋のドアを見て、美穂奈は自嘲気味に笑う。
そう、逃げる勇気なんてないのだ。
なのに、あの両親は一体私がどこに逃げると思ったのだろう。
逃げる場所なんて、どこにもないのに…。
ジッとしてると、時計の音が煩わしく、ゴロンゴロンと無意味にベッドの上で転がる。
「痛っ！」
と、何か固い物にゴツンと頭をぶつけ、美穂奈は転がるのを止め、体を起こした。
無駄にふかふかなこのベッドの上に、一体何なんだと思った私は、ソレを視界にとらえビクリと体を震わせた。
赤い革表紙に、金の縁取りが付いた分厚い本。
「今年も…、なの？」
呟いて、美穂奈はソレにそっと手を伸ばす。
ずっしりとした重みが、掌と心の奥底に刻まれる。
指先でそっと撫でてから、美穂奈は視線を巡らせる。
今、この部屋には自分しかいなく、そして、唯一の出入り口であるドアはやはり固く閉ざされている。
そうすると、やはりこの本は…。
そっと、ページを捲ってみる。
白く眩しいページが、どこまでも続く。
かなり分厚い本だが、さすがに何も書いてないとパラパラと繰るだけで終わり、あっと言う間に最終ページに到達した。
「やっぱり、あの本なのね…。」
何も書いてない。
何も書いてないからこそ、美穂奈はこの本が毎年見ている物と同じ

だと判断出来た。
何も書かれていない不思議な本。
毎年、美穂奈の誕生日になると突然現れる不気味な本。
「仕方がないわね。」
呟いて、美穂奈はその本をそっと枕元に置いた。
ちなみに、不気味だからと投げ捨てたり燃やしたりしても、いつの間にか戻ってくるので、余計に気味が悪い。
それならば、今日という日が終わるまでどこかその辺に置いておく方が幾分かマシである。
今日が終われば、この本はやはり知らない間に消えているのだから。
その時、外から犬の遠吠えが聞こえ、美穂奈は顔を上げた。
滅多な事がなければ鳴かない様に躾られている番犬が鳴いている。
珍しい、泥棒でも入ったのだろうか？
不思議に思い窓の外を見てみるが、特に何もない。
首を一度だけ傾げ、美穂奈は視線を部屋の中へと戻した。
瞬間、ビクリと体が震える。
枕元に置いてあった、あの赤い本が、ひとりでに表紙を開いたのだ。
風ではない。
というか、もし風が吹いたとして、革表紙に金の縁取りがあるあの本の表紙を捲る事なんて無理だろう。
「な、何？」
恐る恐る近付くと、真っ白いページが微かに光っている。
目をこらし良く見れば、それは金色に輝く文字、…の様なものだった。
正直読めない。
つまり、日本語と英語ではない。
フランス語でもないと思う。
…アラビア文字？
最初に抱いた感想は、ソレだった。
模様の様な、でも規則性のある文字の様な、そんな金色に光り輝く

不思議な文字が白いページを埋めていく。
「綺麗…。」
気味が悪いとか、怖いというよりも先に、そう思った。
金色の光は、小さな光の粒子の様で文字の周りをキラキラと彩る。
そっと指を伸ばし、触れてみるが、何もない。
美穂奈の指にその粒子が付くわけでも、感触がするわけでもない。
けれど、美穂奈はなんとなく、その文字を指でなぞった。
ゆっくりと進むその光を、美穂奈も同じ速度でゆっくりと後を追う。
点字をなぞるかの様に、そっと。
どれくらいそうしていたのかは分からない。
ただ、この追いかけっこもようやく終わりが見えてきた様だ。
最後の白いページ。
そこを、今までと同じように金色の文字は進み、埋めていく。
ゆっくりと、美穂奈が最後の一文字を撫でた瞬間、その光は大きく膨らみ…。
そして、弾けた。

少女と男

「どうしよう。」
やってしまった、と美穂奈は頭を抱えていた。
「いや、だって急に出てくるから…。」
言い訳がましく呟いてから、美穂奈は辺りを見渡し、もう一度頭を抱えた。
木の温もりを感じられる簡素な小屋。
ついさっきまで、自室にいたのに…、どうして？とか、そんな事よりも、だ。
美穂奈は目の前で倒れている男の人を見た。
この男の人が突然目の前に現れた、そう思っていたが、この状況。
ここは美穂奈の部屋でも、美穂奈の家でも、もう一つ言えば、窓の外の景色からして、美穂奈の住んでいる街でもなさそうだ。
考えるまでもなく、美穂奈が、突然現れたのだ。
この男ではなく、美穂奈が突然。
なのに。
美穂奈は手の中にある、あの赤い本をギュッと握る。
急に見知らぬ男が出現したと勘違いした美穂奈は、手近にある本で男を思いっきり殴り倒してしまったのだ。
死んではないだろうが、何千ページもある分厚い本の、角。
しかも、金の飾り縁のところで、本の重みに従い腕を振り下ろし殴ってしまった。
しばらくは目覚めそうにない。
美穂奈は一瞬の間の後、男に手を合わせた。
「ごめんなさい。」
一度、しっかりと頭を下げてから、美穂奈は改めて男を見る。
「…変わった色。」
灰緑の髪に、美穂奈は小さく呟いた。

そういえば、一瞬しか見ていないが、今は閉じられている瞳も同じ色だった気がする。
「ふぁ…。」
美穂奈は大きくあくびを1つ漏らす。
何だか無性に眠たい。
思いっ切り運動した後の様な気怠さが、睡魔を連れてやってくる。
美穂奈はそれを追い払うように一度頭を振り、これからの事を考えた。
まずは、この人が目を覚ましたら謝って、それからここがどこなのかを聞こう。
で、場所が分かったら、家に連絡してかえ…。
そこまで考え、美穂奈は首を傾げた。
帰って、どうするんだろう。
眠たく、重い頭で考える。
帰ったって待ってるのは、つまらない婚約者様と、恩は感じていても本当の親だとは思えない義両親。
つまらない結婚生活に、終わったも同然の人生。
帰って、どうするの？
どうすれば良いの？
眠いせいだろうか、頭がしっかりと働かない。
少し、眠った方が良いのかもしれない。
眠れば、少しは、マシな打開策が見つかるかもしれない。
美穂奈はそう結論付けると、体を小さく丸め、そのまま床の上に体を預けたのだった。

■■■■■■■■◆■■■■■■■■■◆■■■■■■■■■

「どうしよう。」
何が起きたんだ、とラズは頭を抱えていた。
「急に殴られて、えっと…。」
気絶する前の事をゆっくりと思い出しながら、ラズは床で丸くなって寝ている少女を見て、もう一度頭を抱えた。
すやすやと安らかな寝息を立てて眠っている少女。
ついさっきまで、本を読んでいた。
長年かけて解読し読み解いていた本を読み終えてしまい、達成感と明日から何をしたら良いんだろうという虚無感に胸の中が綯い交ぜになって…とかそんな事よりも、だ。
ラズは、目の前ですやすやと気持ちよさそうに寝こけている少女を見た。
突然目の前に現れた見知らぬ少女。
その子は、ラズに何か言うでもなく、聞くでもなく、いきなり殴ってきた。
何か固くて重い物で。
相手を気絶させ、その後に家の中を漁り金目の物を盗んでいくなら強盗だ。
気絶させ、トドメをさせば、快楽殺人者か殺し屋かもしれない。
が、相手を殴って気絶させた後に、その場で丸まって寝てしまうのは、いったい何だ？
それは、ラズが知る知識を総動員させても、何にも属さない、意味不明な行動であった。
ラズは首を傾げた。
「何がしたかったのかな？」
呟いてから、ラズは改めて少女を見る。
ふわふわとウェーブのかかった茶色の髪が、床に散っている。
床の木の色と良く似ているから、踏まないようにしなければ。
年々度が合わなくなってきている眼鏡を押し上げ、そう思ったラズ

は、ズキリと痛む頭に一瞬眉をしかめた。
…そういや、何か固く重い物で気絶する程殴られたのだった。
忘れていた訳ではないが、目の前で眠るこの少女のせいで考える暇がなかった。
一体、何で殴られたのだろう？
少女の腕は細く、大きな武器を振り回したりは出来ないだろう。
それに、そんなものを隠す場所もないし。
この小屋に、何かを隠せるだけのスペースも死角もないのは、小屋の持ち主であるラズが一番知り尽くしている。
だとすると、少女が持てるだけの大きさ…あ、もしかしてこれか？
ラズは、少女が大事そうに抱えている本を見た。
長年、自分が読み解いていた、緑の革表紙に金の飾り縁が施してある、あの分厚い本。
「そっか、あれで殴られたのか。そりゃ、あれだけ分厚い本で殴られたら気絶ぐらい…あれ？」
そこでラズは何か違和感を感じる。
少女が抱きかかえている本。
それは、たしかに自分が毎日毎日見てきた本なのに、何かが違う。
「あ…、色…。」
呟いて、確信する。
そう、ラズの知ってる本は、緑の革表紙に、金の飾り縁。
だが、少女が抱えている本は、赤い革表紙に、金の飾り縁。
色が、違うのだ。
「だとすると、やっぱり中身も違うのかな？」
ラズは、そっと少女へと手を伸ばす。
その、赤い本の中身が知りたくて。
やはり、あの緑の本の様に、パッと見は、ただの白紙の本なのだろうかと。
指先に、本が当たる。
そっと撫でれば、ザラリとした革の感触。

緑の革表紙と同じ感触だった。
瞬間、少女の瞳がゆっくりと開いた。
髪と同じ、濃い茶の瞳がこちらに向けられ、ラズをとらえた。
あ、ヤバイ。
ラズが咄嗟にそう思ったときには既に遅かった。
「…キャーッ！」
少女は先程と違い、そう叫んだ後、ラズの頬にあの赤い本を叩きつけたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5970y/

---

colors

2011年11月24日17時01分発行